

使命(要点)

- 多様な神戸文化の特徴と東西文化交流の態様を明らかにし、地域の発展に役立つ「知の拠点」となります。
- 優れた文化・芸術にふれあう機会を「提供」し、新たな調査・研究を「提案」し、その成果を「発信」する博物館となります。
- 市民・利用者が集い、神戸を愛し、誇りとする拠りどころが得られる博物館になります。
- 震災と復興のなかで得た知見を発信していきます。

段階評価の基準について	
A	目標が十分達成されている(9割以上)
B	目標がほぼ達成されている(7~8割以上)
C	目標の達成がやや不十分である(5~6割以上)
D	目標が達成されていない(5割未満)
F	評価が困難

活動指針

- 市民が誇れる博物館
- すべての人々に親しまれる博物館
- 地域の文化を支える博物館
- 情報発信をする博物館

活動目標	内部評価			
	活動目標	活動内容	略方向性	指標
◎活動内容【目標計画】 ○戦略・方向性 □指標	評 価	評 価	評 価	評 価
	参考数値 参照・比較値(過年度実績等)	目 標 値 a	実 績 値 b	達成率 b/a
				コメント(必要な場合)
地域の歴史情報や未来の指針が得られる博物館にします 文化財を保存・継承していく博物館にします	館としての調査研究課題の設定や計画への取組みは、まだ十分ではない。資料の情報開示については、電子情報としてHPを通じての市民への発信・提供を計画しているが、年次毎の明確な計画を立てる必要があろう。資料の収集に関しては、現行の評価の視点に立てば、予算上の問題が大きく、今後も予算が好転することが見込めない現状では、別の評価の視点を持って活動することも検討すべきと考える。			
◎調査・研究を積極的に行います	調査研究テーマの設定では、館としての組織的・計画的な取組みとしてまだ不十分などところがあり、引き続き在り方を検討するとともに、データの整備に努める。			
【】調査研究は収集、保存、展示などの博物館運営の基礎となる欠かせない活動であり、個々人の調査研究とともに、博物館としての組織的な取組についても活性化していく。その成果を諸活動に活かし、発信していく。				
○調査研究テーマの設定と方針の明示、実績の公開	個々では課題が設定され、調査、研究がおこなわれ、また館としても課題の設定が行われたが、計画的な調査活動といえるまでには至っていない。			
□調査研究テーマの設定	—	研究テーマを明確化したが、計画の実施の面では全体的な取組みとしていくにはまだ時間が必要		
□調査件数	20年度 51ヶ所 21年度 40ヶ所	昨年度に比べやや減少しているが、過年度のデータ不足のため当分は実績値の把握に努める。		
□研究成果発信数	20年度 81件 21年度 67件	昨年度に比べやや減少しているが、過年度のデータ不足のため当分は実績値の把握に努める。		
◎地域の歴史に関する情報を発信します	概ね情報発信は様々な機会を通じて活発に行われたが、地域や期間を限った調査活動とその成果の発信という面では課題を残す。			

【】多様な神戸文化の特徴を調査し、その成果を発信することは当館の重要な使命の一つである。地域に関する資料を収集、整理、保存し、また地域の歴史や地域に残る資料の調査などにあたり、その情報、成果を発信する事業などを恒常的に実施するとともに、有馬・兵庫・須磨・旧居留地など、地域と期間を限ったの調査活動を重点的に実施し、発信する事業にも取り組む。情報発信にあたっては、市民、利用者のニーズにあわせ、様々な媒体を使って積極的に取り組むとともに、成果を市民と共有していく手立てを講じることで、博物館が地域の発展に欠かせない存在になるよう寄与していく

○有馬・兵庫・須磨・旧居留地など、地域の歴史を調査し、その情報を発信する事業を展開	展示などの事業や館のツールでの発信は概ね計画されたとおりに実施されている。		A
□自主企画の特別展・企画展の開催	特別展1回、企画展1回	自主企画の特別展「海の回廊」では、地域に伝えられた文化財を初公開もふくめ、数多く展示し、改めて文化の多様性が話題になった。また「古写真と絵画に見る神戸」では撮影ポイントの比較など、分かりやすい展示で好評を博した。	A
□その他関連事業の開催	ミュージアム講座6回のうち4回、博物館を楽しむ3回のうち3回、こうべ歴史たんけん隊1回、こどものためのワークショップ5回のうち3回、まなぼう！あそぼう！親子で楽しむ体験講座44回のうち31回、ジュニアミュージアム講座6回のうち1回、企画展オリエンテーション3回のうち1回	例年の講座やワークショップなどの中で、地域の歴史や文化を取り上げたことに加え、特別展「海の回廊」、企画展「夏休み親子はくぶつかん“どうぶつ”すきな子よつといで！！」の開催に合わせ、活発に実施することができた。とくに「夏休み親子はくぶつかん」でのワークショップでは、31回404名の方々に地域資料を親しんでもらうことができた。	A
□地域資料の展示	関連点数:「海の回廊」27件61点、「古写真と絵画に見る神戸」42点など	常設展、ギャラリー、「みてコレ」コーナーに加え、自主企画の特別展「海の回廊」、ギャラリー「古写真と絵画に見る神戸」で、新収蔵資料や初公開資料などを多く展示した。	A
□新聞雑誌や講演会での情報発信数	館としては図録1種類(『海の回廊』)、紀要3本、だより2本のほかに、新聞記事(展覧会、ミュージアム講座)など館外での発信をふくめ27件(20年度33件)。	昨年度に比べやや減少しているが、過年度のデータ不足のため当分は実績値の把握に努める。	B
□地域史に関する対応件数	特別利用として141件、また特別利用としての対応ではないものが15件(20年度207件)。	昨年度に比べ減少しているが、過年度のデータ不足のため当分は実績値の把握に努める。	B
○関連資料のDBの構築	DBはまだ構築できていないが、基礎的な準備作業が行われた。		F
□DBの利用数	公開のためのデータベースはまだ構築されていない。	緊急雇用対策事業によって神戸の写真・絵葉書を中心とする資料約4100点の画像入力を21年度中に終えた。まだ不完全ではあるが、当該分野のデータベース構築の実現性が高まりつつあるので、その具体的な実現方法について検討に移りたい。	F

◎「東西文化交流」と神戸の歴史に関わる文化財を永続的に収集します

資料購入は必要な資料を収集するにはまだ十分とは言えない状況であり、今後に大きな課題を残している。

C

【目標 計画】神戸の地域関連、あるいは東西文化交流に関わる資料について、その散逸を防ぎ、可能な限り収集するのは、博物館の重要な機能のひとつである。価値の高い資料を分野に偏ることなく収集することが求められる。

○特色ある館藏品等の充実、収集方針の明示と実績の公開

収集の方針に沿った資料収集がおこなわれ、適宜展示などに生かされている。資料購入が復活したことは前進であるが、十分とは言えない状況であり、また寄贈資料にはどうしても分野の偏りが出やすく、限界がある。

C

□資料収集数(購入)

19年度:2件7点3,335千円
20年度:0件0点0円
21年度:2件2点369千円

20年度は、資料購入が行われなかったが、今年度は2件2点の資料を購入することができた。

C

□資料収集数(寄贈)

19年度:43件647点総評価額16,973,600円
20年度:4件38点総評価額20,113千円
21年度:43件369点総評価額3,916千円

常設やギャラリーに、収集後すぐに展示したり、22年度に展示を予定している資料もある。今年度も、当館にふさわしい資料が収集できた。

C

□資料収集数(寄託)

19年度:2箇所2件2,125点
20年度:0件0点
21年度:0件0点

本年度は寄託資料の受け入れはなかったが、次年度受け入れ予定資料の整理などを行った。

C

◎社会的資産としての文化財(館藏品)を保全し、後世に伝えます

限られた予算や体制の中で実施できることについては計画的に行ってきたが、施設、設備の改修、予算の獲得などの課題が多い。

B

【】収蔵資料の永年保存は他の公共施設と一線を画する博物館の中核機能である。しかし、博物館に収蔵されている資料も、ひとたび注意を怠れば、重大な破損・滅失の危機に直面する。化学的殺虫殺菌処理にたよらない、日常的な監視態勢と迅速適切な処理(IPM)が、博物館・美術館業界の資料永年保存の標準となっている昨今において、その完全な遂行は博物館の重大な使命として位置づけられる。

○方針の明示
○良好な収蔵環境の整備

モニタリングや定期清掃など計画通りにほぼ実施してきたが、問題は依然として解決していない。施設、設備の面からの解決が必要。

B

□収蔵(保存)環境の調査・整備(IPM)

21年度、収蔵庫温湿度測定を毎週3ヶ所、虫類モニタリングを月1回、生物環境調査を年2回、収蔵庫定期清掃を年4回、殺虫作業を1回(重点箇所は2回)実施

モニタリングと清掃はほぼ過不足なく実施されたが、収蔵環境の根本的改善には依然として課題が山積している。空調機能の根本的改善は困難だが、温湿度傾向はやや改善されている。虫害対策の燻蒸作業を年度末に行った。収納態勢の整備は21年度後半から行なわれ、現在も作業を継続中である。

B

○資料の保全

計画の検討、予算の確保、分野ごとの予算配分など、依然として課題は多い。

C

□資料の補修

19年度:92点
20年度:169点
21年度:315点

限られた予算の中で、資料の状態や展示などの観点から緊急度の高い資料を選び、特定の分野に偏ることなく実施することができた。しかし、補修の必要な資料は膨大な数に上っている。

C

○大震災による被災の教訓と復旧・復興の記録の公開	HPに大震災コーナーをもうけ、堅実な利用実績がある。また問い合わせなどへの対応も行っており、必要な発信は行われている。					A
□大震災の記録の利用	16年度:11727件 17年度:10683件 18年度:12857件 19年度:13272件 20年度:11778件	ホームページの平成21年度アクセス件数は15,126件。震災後15年を経ても、アクセス数は増加している。また、震災学習のための学校からの問い合わせや防災をテーマとする展覧会を準備している行田市郷土博物館などについて、個別に対応している。				A
◎館蔵品に関する情報開示の整備をおこないます		ルーチンな業務として行なわれている情報公開は計画通りに実施され、活用されているが、DBについては、一部ではあるが公開にむけた準備段階に至ったことは前進といえる。				B
【目標 計画】博物館の所蔵品は神戸市民、そして本市の歴史文化と東西文化交流に関心を寄せる全ての人々の共有財産であるとする観点から、その情報を可能な限り公開することが望まれる。特にインターネットを媒体にしたデータベース公開の実現を目指すべきである。						
○館蔵品情報の継続的な発信	目録など印刷物での情報公開は計画通りに行われ、特別利用も十分に活用されている					B
□館蔵品目録の継続発行	美術の部1冊・歴史の部1冊を刊行	美術の部1冊・歴史の部1冊を刊行	美術の部1冊・歴史の部1冊を刊行	100%	過不足無く刊行できた。	A
□館蔵品の特別利用数	19年度:603件 20年度:709件	709件(前年度実績)	713件	100%	特別利用については、十分な実績数をあげている。	A
□ホームページへの掲載	20年度 : 100点	150	0	0%	22年度内での目標達成に向け準備中。	D
○博物館資料DBの構築	DBはまだ公開に至っていないが、公開に向けて一部の分野での準備作業は進捗している。					F
□データベースのアクセス件数	—	0	0	0%	公開のためのデータベースはまだない	F
すぐれた芸術・文化に出会える博物館にします	薩摩切子、シアトル美術館展では、上質のガラス工芸品、日本美術品を展示した。海の回廊は、助成金を獲得し、考古、歴史、仏教美術の担当者が横断して創り上げた企画として意義深く、成果を残した。企画展では、所蔵品の中から浮世絵、銅版画に特化して展示し、所蔵品の幅を示し、展示に新生面を開いた。夏の企画展では、南蛮屏風、ザヴィエル像を展示し、また動物に特化したテーマは、当館の所蔵品と様々な階層の鑑賞者を結びつけた。ギャラリーは、所蔵の近代絵画を展示し意欲が認められた。自主企画展は、いずれも広報費が充分ではなかった。特別展でも作品の質に比して、目標の来館者数には至らなかった。常設展示は、新しい資料の意欲的な展示が望まれるが、トピックスを設けた展示は試みとして評価される。展示と講座を関連させるなどの新たな試みが望まれる。予算内でも展示の工夫は可能なはずで、来館者にアピールするような展示が望まれる。魅力のある新しい視点の掘り起こしが、自主企画特別展、企画展、常設展示に必要な。					B
◎楽しく学べる魅力的な常設展示を行ないます	経常的な業務のレベルでは魅力ある展示にする努力がそれぞれで行なわれているが、リニューアルに向けた中期的な取り組みに向けた検討や整理も必要。					B

【目標 計画】常設展示(ギャラリーを含む)は館の特色を最も発揮し、展示活動の基本となるところである。日常的な取り組みの活性化を図るとともに、学習室を除いて大幅なリニューアルが行われていない現状を踏まえ、将来に向けた準備も行っていく必要がある

○常設展示の内容の更新・拡充・整備	展示資料の入れ替え、展示方法やテーマの工夫などで、展示内容についてはより魅力ある展示になるよう努力が行われ、また展示解説においても努力の結果があらわれているが、経費が必要な展示設備や施設のリニューアルについての検討が行われていない。		B				
□展示替え	20年度:26回 21年度:32回	必ずしも計画的に行われたわけではないが、積極的に新収蔵資料を展示するなど、実情に合った形で実施することができた。	B				
□常設展示内容	—	とくにギャラリーでは、補修資料のまとまった展示を行うなど、調査研究と資料補修の成果を生かした展示を行うことができた。常設展示においても、展示内容や展示手法に工夫するなど努力を重ねてきている。	B				
□展示解説開催数	平成20年度は、参加者数166人、平均2人。(12/20-)参加者のいない日数(25日)。	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="1059 488 1249 863">特別展を開催していない期間毎日実施</td> <td data-bbox="1261 488 1429 863">(前期-9/30)参加者数81人 平均2.5人 (後期10/1-)参加者数113人 平均5.1人 (通年)総参加者数194人 平均3.5人 参加者のいない日数 29日</td> <td data-bbox="1440 488 1552 863">前期57% 後期85% 通年65%</td> <td data-bbox="1563 488 1928 863">通年の達成率は70%に届かなかったが、後期は85%に上った。実施内容を再考し、その回数を増やしたことが、功を奏したと考えられる。</td> </tr> </table>	特別展を開催していない期間毎日実施	(前期-9/30)参加者数81人 平均2.5人 (後期10/1-)参加者数113人 平均5.1人 (通年)総参加者数194人 平均3.5人 参加者のいない日数 29日	前期57% 後期85% 通年65%	通年の達成率は70%に届かなかったが、後期は85%に上った。実施内容を再考し、その回数を増やしたことが、功を奏したと考えられる。	C
特別展を開催していない期間毎日実施	(前期-9/30)参加者数81人 平均2.5人 (後期10/1-)参加者数113人 平均5.1人 (通年)総参加者数194人 平均3.5人 参加者のいない日数 29日	前期57% 後期85% 通年65%	通年の達成率は70%に届かなかったが、後期は85%に上った。実施内容を再考し、その回数を増やしたことが、功を奏したと考えられる。				
□展示設備・施設の改修	—	本年度は、早急に修理が必要な箇所が見受けられなかったため、応急の修理は実施しなかったが、来年度以降も改修計画に向けた問題点の把握に努める必要がある。	F				
◎特色ある館蔵品を活かした展示を行います	コレクションの公開は各展覧会の開催により概ね実施されているが、魅力の発信という点では広報やニーズの把握に努める必要があり、また計画性の面でも課題がある。		A				
【】特色あるコレクション、調査研究の成果を生かした展示は博物館の基本となる活動であり、館の力量が問われるところである。常設展示(ギャラリーを含む)以外に、南蛮紅毛美術、古地図などの企画展、調査研究にもとづいた自主企画の特別展をそれぞれ少なくとも年間1回は開催し、魅力を発信する							
○調査研究に基づく自主企画の特別展・企画展の開催 ○南蛮・古地図の企画展の開催	企画展、自主企画の特別展はおおむね開催できており、展示内容や展示方法についても様々な工夫が行なわれている。しかし魅力の発信という点で十分な広報ができていないことや、アンケート結果を活動に生かしていくことが課題としてある。		A				

<input type="checkbox"/> 展覧会開催	平成19年度・20年度とも、自主企画特別展、企画展、南蛮紅毛美術企画展、古地図企画展を各1回、ギャラリー展示を2～3回開催	企画展は古地図・南蛮美術のものを開催し、新たな複製品(南蛮屏風)の展示などで新聞などでの話題を呼び、本物の展示が出来ない時に役割を果たすことが出来た。自主企画の特別展として日本財団の助成を受け、当館のテーマに沿った「海の回廊」を開催した。指定文化財の公開促進をはかり、展示内容に高い評価を得たが、来館者の目線に沿った広報だったか検討する必要がある。また銅版画や夏休みの企画展では実験的な展示、連携などで新たな取り組みをすすめ好意的な意見が寄せられた。 今年度の特徴ある館蔵品を活かした展覧会： 特別展「海の回廊」(平成22年1月16日～3月7日)、 古地図企画展「江戸時代の世界図遊覧」(平成21年4月18日～5月31日)、 南蛮美術企画展「近世初期風俗画と南蛮工芸」(同)、 企画展「ズームアップ！日本の銅版画」(同)、 企画展「夏休み親子はくぶつかん “どうぶつ”すきな子よっといで！」(平成21年7月18日～8月31日)、				A	
<input type="checkbox"/> 入館者数	19年度:116% 20年度:131%	海の回廊11,400人	10,704人	93%	特別展「海の回廊」では、神戸新聞社との紙面共催、さらに近年広報宣伝費の削減により実施できていなかった駅貼りを行った結果、高い達成率を得ることができた。		A
<input type="checkbox"/> 満足度	すべての展覧会に関して、アンケート調査を実施し、来館者の満足度を図ることができた。また日々供覧し情報を共有化することで、必要な改善意見に関しては、早急に対応することができた。				A		
◎海外展などの特別展を開催します	大型海外展の実施は、海外の著名作品を市民に公開できる機会であり、博物館活動の核である。あわせて神戸市の中心地である三宮地域を活性化させる文化イベントでもある。将来にわたって、その計画をマスメディア等との協力で押し進めなければならない。			B			
【目標 計画】 博物館は人々がすぐれた文化財と対話できる場でなければならない。国内外の博物館施設、または新聞社等のマスメディアと共同し、質の高い大型展を年に1～2回の頻度で開催する。そのための財源確保、広報計画など広範囲な業務を事前の計画の下、実施する。							
<input type="checkbox"/> 国内外のすぐれた資料、作品を展覧会で紹介	大型海外展をとおり、海外に流出した日本の貴重な文化財を里帰りさせ展示できたことは大いなる成果であった。一方では、予算収支からの入館者数をクリアできなかった事をふまえ、内容と共に予算面においても、計画段階で一層の調査が必要と思われる。				B		
<input type="checkbox"/> 特別展開催	—				A		

<input type="checkbox"/> 入館者数	ー	2展覧会合計106,460人(薩摩切子展: 62,852人、シアトル展: 43,608人) 参考: トリノ・エジプト展1日平均2,327人	ー 薩摩切子展は草の根的な広報が奏功し、工芸の展覧会としては善戦した。シアトル展は知名度、神戸とのつながりを強調した広報戦略などの面で課題を残した。また内容の面でも作品選定などの企画へのかかわりについて課題を残した。	C
<input type="checkbox"/> 満足度	すべての展覧会に関して、アンケート調査を実施し、来館者の満足度を図ることができた。また日々供覧し情報を共有化することで、必要な改善意見に関しては、早急に対応することができた。		A	
芸術・文化を介して、利用者が広く交流できる博物館にします	学校連携事業や講座などの教育普及事業については、ほぼ計画通りに実施できており、事業量的には満足できる水準に達している。アンケート分析などを通じての、市民および来館者のニーズ把握は十分になされているとは言い難く、早急に分析等の実施を行うべきである。ボランティア活動に関しては、2年目を迎え当年度の活動目標は概ね達成できた。		B	
◎学校との連携を図ります	神戸市内にとどまることなく、広く学校と連携できている点は大きく評価できる。教育普及プログラムも、新規の事業を交えて水準を維持している。交流できる博物館としての機能は十分に果たしているため、今後もそれを維持していくことが望ましい		A	
【目標 計画】 博物館が所蔵している特色ある資料をもとにした教材の開発や展覧会独自のワークショップ等を行い、来館者への機会の提供かつ出張授業等に積極的に取り組むことが博学連携の在り方としては不可欠となっている。将来に向けても学校と連携を図り利用の場としてあるように、プログラムの蓄積と整備を計画・実施していく必要がある				
<input type="checkbox"/> 学校との連携	例年どおり、学校との連携は十分に図れている。今後とも、ハード・ソフト両面の整備に努める必要がある			A
<input type="checkbox"/> 小・中・高等学校の受入数	幼稚園⑩0⑪2⑫6⑬1⑭6、小学校⑮65⑯42⑰62⑱52⑲60、中学校⑳88㉑47㉒66㉓91㉔84、高等学校㉕22㉖22㉗33㉘54㉙32、その他(大学・専修学校など)㉚15㉛13㉜14㉝26㉞33、合計㉟190㊱126㊲181㊳236㊴215校園㊵11090㊶78500㊷10722㊸14575㊹10618人 過去5年間の平均189.6校園11101人	学校の要望等に沿ったかたちで、来館への対応(幼稚園1、小学校52、中学校57、高校20、その他23 計153校園6812人)、オリエンテーション(来館校園のうち34.6%)、またトライやる(14校29人)の受入など、適切な受入が図られている。		A
<input type="checkbox"/> 連携数(出張授業等のアウトリーチ数、教材の貸出数)	⑩幼0小14中19高2計35⑪幼1小19中14高1計35⑫幼2小35中12高1計50⑬幼2小54中18高2計76⑭幼1小44中9高0計54 過去5年間の平均幼1.2小33.2中14.4高1.2計50	インフルエンザなどの影響が危惧されたが、例年よりも出張授業数は多かった。また可能な限りでの広報活動や学芸員と指導主事の体制づくりを進めることができた。小学校64、中学校10、高等学校2 合計76校		A

□教員研修の受け入れ	<p>教員のための博物館活用研修会⑬6回 247人⑲9回278人⑳4回232人 過去3 年間の平均6.3回252.3人</p>	<p>教師の研修制度が変更されたため、初任者研修の博物館における臨地研修が実施できなかったが、実態に即した研修の受け入れを行うことができた。①教職員社会体験研修 神戸市立本山南中学校・玉津中学校・こうべ小学校・尼崎市立武庫庄小学校 4校延べ7日 ②7月14日 小学校社会科研究会 20名 ③8年目研修 16名</p>			A
□大学との連携事業数	<p>平成16年度:博物館実習(22校、38名) 平成17年度:博物館実習(20校、37名) 平成18年度:博物館実習(23校、39名) 平成18年度:博物館実習(29校、42名) 平成20年度:博物館実習(23校、39 名)、見学実習(4校、56名)</p>	<p>夏期の博物館実習は3班にわけて行い、実習生を20大学、34名受け入れた。また、見学実習は6校、112名を受け入れ、それぞれの要望に沿ったかたちで見学およびオリエンテーションを行った。</p>			B
○教育普及プログラムの確立	<p>文化庁の支援金などによりながら、教育普及プログラムの充実が図られている。今後とも、館蔵資料にとどまらず、地域資源も視野に入れたプログラムを順次開発していくことが望まれる。そのためには、毎年継続して予算を獲得する必要がある。</p>				A
□教育普及プログラム数・内容更新	<p>21年度、居留地マップ:長田南小学校など 兵庫絵図:藍那小学校 地球儀:友が丘中学校</p>	<p>予定通り制作し、連携授業や学校団体来館時に活用することができた。</p>			A
□子ども向け事業の展開	<p>子ども向けチラシやホームページ上での 広報活動 別表2参照</p>	<p>定例的な事業については例年どおり円滑に実施されている。ただ展覧会に付帯する臨時の事業については、より一層周知を図り、事業に努めることが肝要である。現在、行うことができる広報活動をすべて行うことができた。特別展や夏休み行事については、市内小中学生の人数分のチラシの配布やホームページ上での広報活動を行うことができた。今後チラシの配布先を増やしたり、対象年齢を広げたりするなどの工夫が必要。</p>			A
◎地域との連携を図ります	<p>地元企業や商店街、地域団体などとの連携と協力は順調に進展しているが、本年度に北隣にオリエンタルホテルが復活したように、今後は旧居留地地域とのさらなる連携を図る必要がある。</p>				B
<p>【目標 計画】博物館はその立地する地域と不可分の存在である。博物館は地元の文化財のみならず、生活する人々とその活動すべてに関わりをもたねばならない。博物館はその事業を計画・実施する際に地域の学校や社会教育施設、文化団体、商業施設やマスコミなどと連携を重視しなければならない</p>					
○居留地協議会、周辺商店街等との連携	<p>前年度にない共催相手を獲得しており評価できるが、今後とも館の活動との整合性をとりつつ、さらに進展させる必要がある。</p>				B
□連携数など	<p>昨年(平成20)度は、大丸とポスター掲示・ちらし配布で相互に協力した。三宮センター街とは大型特別展開催時には垂れ幕やポスター掲示をした。</p>	<p>大丸とは、年度当初予定していたポスター掲示・ちらし配布以外に「トリノ・エジプト展」と「高橋留美子展」での相互割引を実施。三宮センター街での垂れ幕・ポスター掲示も前年度と同様に実施。神戸税理士共同組合とも協力した。前年より、協力関係の組織が増加した。</p>			A

□共催事業など	平成20年度は、第13回居留地シネマ「かくも長き不在」を21年3月27日～28日（一日二回上映）を実施。	中小企業基盤整備機構・経済産業省が主催する「感性価値創造ミュージアムinKOBE」(9/5～13)と共催・協力した。日程があわず、年度当初に計画していた「居留地シネマ」は実施できなかった。居留地シネマは、日程調整の問題が常につきまとう。毎年確実に実施できる保証がないのが、問題である。しかし、コープこうべと大丸や被災市民交流会実行委員会とは共催・協力できた。	B
○生涯学習の支援	実績値は昨年度より減少しているが、地域からの依頼については対応している。今後、望ましい連携の在り方について検討する必要がある。		B
□連携数(出前講座・講師派遣など連携事業数)	20年度 25件、 21年度 15件	昨年度から減少しているが、地域からの依頼については日時の調整をして対応している。過年度のデータが不備のため、今後実態の把握に努め、より有効な連携の在り方について検討する必要がある	B
◎他の博物館・美術館との連携を図ります	資料や学芸員の相互連携は充分なした。将来的には複数館を交えた展覧会や、海外の館との連携を探るもしくは努力する必要がある。	A	
【】博物館は単独では存続し得ず、常に同じ博物館相当施設と連絡と協力をしなければならない。それは日本国内のみならず広く世界的な範囲で交流すべきで、そのためには館を支える学芸員の切磋琢磨とそれを支える体制作りが必要である。			
○他の博物館・美術館等との情報交換、連携事業の展開	研修会参加や展覧会での共催、作品の貸借、講師派遣などは、相手次第でその数は変動するため、その増減を問うことは意味がない。今後とも他館・他組織との連携に適宜応えられるよう努める必要がある。		A
□他館での館蔵資料の発信	平成20年度:24件 241点 平成21年度:34件、261点	平成21年度、昨年度を上回る作品・資料を貸出し、他館の展覧会において活用された。当館のコレクションと博物館は、他館の展示および図録などによってより多くの人に周知されるようになっている。	A
□他館での委員、講師など	他館における評価委員、講演会講師、他都市の審議会委員など15件(20年度22件)	昨年度と比較して少し減少しているが、当館内の業務にとどまらず、他館、他機関で専門性を生かした活動が行われている。	A
□他館との共催事業	当初に計画した以外に、神戸市立王子動物園・津山洋学資料館の2館と今年度共催し、文化庁の事業にも協力した。	昨年度および年度当初の計画以上に共催事業をおこなった。王子動物園との共催事業では、実際の生きた動物を観察・スケッチすることで、博物館で展示していた作品への理解が深まったと思われ、参加者にも好評であった。しかし津山洋学資料館との共催事業は、資料の貸出だけでなく、展示指導等もおこなわねばならず、当館側の負担が大きかった。文化庁の事業への協力も、国内の集荷返却やミラノ会場へのクーリエ・展示作業などがあり、負担が多かった。共催事業の内容により、メリットより負担が大きい場合がある。	A
◎各種講座を一層充実します	例年の事業を踏襲しているとの感は否めないが、新規の受講生を獲得するために広報の展開を図った点は評価できる。今後は、大人のためのワークショップなどの新規事業を開発していくことも求められていると思う。次年度の検討課題としたい。なお、自主企画の特別展・企画展については随時ギャラリートークが実施され、好評を得ている。博物館学芸員の顔が見えるような活動に取り組んでいく必要があろう		A

【目標 計画】生涯学習の場として、博物館は社会教育施設のなかでも欠かせない存在である。来館者に対して講座等を積極的に行うことで、展覧会理解、館蔵資料、各自の研究成果を発信し、博物館の魅力を伝えていく

○講座内容の開発、充実	両講座とも例年どおりの事業が実施できた。また、ギャラリートークについても各展覧会で実施することができた。講座内容の充実、開発については今後の課題としたい			A		
□事業数	両講座とも例年どおりの事業が実施できた。また、ギャラリートークについても各展覧会で実施することができた。講座内容の充実、開発については今後の課題としたい	当館の特色や資料を活用した恒例の事業が実施できた。今後も多彩な講座内容を盛り込みたい。			A	
□参加者数	平成20年度の受講者はミュージアム講座155人、楽しむ20人	M講座150人 楽しむ20人	M講座143人 楽しむ11人	M講座 95.3% 楽しむ 55%	定員に達していないが、「博物館を楽しむ」は資料が多数のため場所、事故を考慮すると、11名は適切であった。平成20年度に比べ減少したのは、「広報こうべ」以外は、前年度受講者にのみDM送付のため。「ミュージアム講座」受講者にDMを送付すれば激増が予想され、抽選となる。人数調整が難しく見送った。	B
○利用者ニーズの把握	アンケート調査に基づいた利用者ニーズについては実施しているが、その検討は行われているとは言い難い。受講者の満足度は達成されているといえるが、過去の調査結果をもとに各種講座にどのように反映させていくか検討する必要がある。それが新規講座の開発にもつながるものと思われる			A		
□利用者満足度	60～70歳代 87.5%、 神戸市民 86.3% 別表1参照	平成21年度の「ミュージアム講座」は14回目を迎えたが、アンケートで第1回より参加しているとの回答者が複数存在する。「博物館を楽しむ」と両方受講する人もいる。継続受講者のありがたさを感じるとともに、平均年齢上昇の一途が懸念される。特別展に関する講座の希望は根強くあり、受講者が歴史・芸術分野における安価かつ充実した生涯学習機関として、当館の講座に期待を抱いている傾向が顕著に見られる。			A	
◎広報活動を充実し、各種事業を広く紹介します	21年度よりホームページ更新が簡便となり、迅速な情報提供が出来るようになったが、今後ともその活用が望まれる。またテレビといったマスメディアとの連携をはかり、携帯サイトなどの活用も検討すべきではないか。			B		
【】博物館の基本活動は文化財の収集と保存、活用である。それらの活動は今に生きる人々に理解されることによって、いっそうの発展を遂げることができる。そのためには、展覧会広報のみならず、博物館活動すべてをあらゆる媒体を通じて知らしめる必要がある。						
○広報活動の充実	予算の無い中で、庁内イントラや道路看板、ミニコミ誌など活用し、幅広い広報に努めた。今後はさらに、無料広告の開発と利用に努めなければならない。			A		

<input type="checkbox"/> 広報掲載件数	前年度情報発信件数(300件)。平成21年度は508件。	前年度(300件)より多い情報発信件数(508件)であった。展覧会の内容でマスコミからの情報依頼件数が変わるが、これからも積極的に情報発信に勤めたい。		A
<input type="checkbox"/> HPの更新	アクセスは前年度の7割程度の数であった。これはホームページの中身というよりも、展覧会の注目度の差であり、入館者数にもそれは現れている。21年度はホームページの更新手続きが簡便となり、今後はさらに迅速に、かつ注目される内容を発信できるよう努めなければならない。			B
<input type="checkbox"/> HPの更新回数、ページ数、アクセス数	20年度のアクセス数は413220	21年度のmain.htmlへのアクセス総数は3月31日現在で約29万7千となっている。展覧会によるアクセスの増減もあるが、HPそのものの内容充実も今後の課題となる。		B
<input type="checkbox"/> メール会員向けの新たな情報発信事業の開発	メール会員制のメリット、デメリットなどを具体的に検討し、次年度以降に導入できるよう備える			F
<input type="checkbox"/> メール会員への発信数、メール会員数	メール会員の制度を採用していない	導入に当たってはメール会員制のメリットなど十分に検討することが必要		F
◎市民ニーズを把握し、必要な改善を行ないます	現状のアンケート調査の活用と、さらなる調査方法の工夫をこらすことが必要。また、昨今話題となっているツイッターやメールなどを活用できるかの検討に入らなければならない。		C	
【】 博物館は地域とそこに生活する人々のために存続しなければならない。文化財の保存とそれを利用した諸活動は相互に補完しあわなければならないが、さらにそれらは市民のニーズに応えるものであることが理想であり目指す目標といえよう。市民ニーズの把握のためのツールを持つことと、その分析、さらにはその活用を図らねばならない				
<input type="checkbox"/> 定期的な利用者へのアンケート調査 <input type="checkbox"/> 非来館者を含めた意識調査	アンケート調査は展覧会にとどまらず各講座などでも実施し、そこに書かれた意見などには迅速に対応できた。ただし、アンケートの総合的な分析や公開は不十分であり、その取り方も含めて今後の課題といえる。			C
<input type="checkbox"/> アンケート調査に基づくニーズ・満足度の把握	—	すべての展覧会に関して、アンケート調査を実施し、来館者の満足度を図ることができた。また日々供覧し情報を共有化することで、必要な改善意見に関しては、早急に対応することができた。また体験講座等に関するアンケートについては、設置型ではなく、実施後すぐの実施とし、対面調査的な要素を持たせた。		B
<input type="checkbox"/> HPへの掲載・公開	21年度は、自主企画特別展・企画展に関するアンケートについて、ファイルメーカー形式で作成した新たな入力システムを導入した。このシステムの導入により、データの蓄積が可能となった。	データの蓄積は可能となったが、公開については検討の継続が求められる。		F
<input type="checkbox"/> アンケート評価への対応と改善	—	すべての展覧会に関して、アンケート調査を実施したが、担当者間でのアンケートを踏まえた議論までは実施できなかった。		C
◎ボランティア活動を通じて、人々が交流できる場を作ります	居留地マップやツールボックスの作成、一部学校との取り組みなど、各種行事の参画などが進みつつある。今後とも活動に対する相互の理解を図るとともに、次年度への展開を図る施策が求められる。また人材の育成という視点にも力点を置くべきである。		B	

【】博物館運営のなかで、人々が交流できる場としてボランティアは一つの姿となりつつある。しかし、単に業務の代替を求めるのではなく、独自の運営形態を職員・ボランティア相互で生み出す必要がある。また、活動を円滑に進めるために、ハード・ソフト両面において整備を図る

○ボランティア活動の実施	2年目の活動としては、積極的な活動への索導が試行できていると考えられる。ただ体制面という点では、担当職員のみで、全職員が積極的に関わっていないことが難点でもある。積極的に交流することで、体制の充実をはかることが求められよう。	B
□実績(人数、回数、内容)	<p>学習支援交流員制度導入から2年目を迎え、3名が継続、21年度、新たに11名が登録した。21年度はこの14名のうち8名が中心となって活動を展開した。</p> <p>4月1日～3月31日の開館日数283日/6日47.2週、学習支援交流員14名、当初の活動目標週1～3回、平均2回として目標設定。目標値378人</p> <p>活動延べ人数:4月26人、5月28人、6月20人、7月44人、8月29人、9月20人、10月26人、11月39人、12月18人、1月35人、2月33人、3月35人 計352人(目標値378人に対する達成率は93.1%)。具体的な活動は以下のとおり。子ども向け講座64回の実施に22名、ミュージアム講座6回の実施に19名、定例会12回の実施に145名が参加した。ワークショップ等に関しては適宜研修を実施した。このほか、交流員間でワーキングチームを結成し、居住地マップの製作とミュージアムツールボックス(都の南蛮寺をモチーフにした扇子づくりワークショップツール)の開発を行った。これらのマップやツールボックスを用いて、トライやるウィークの中学生の居住地探検や来館した学校団体の体験補助などを行った。また館に対する来館者の見方を知ってもらうため、展覧会等において実施したアンケートの集計にも携わった。</p>	B
○活動内容の充実	実施回数3日(4回) 展覧会ができるまで(問屋)居住地について(田井)学習支援ツールの制作について(橋詰)博物館におけるボランティア活動について(中村)	B
□活動内容	—	B
すべての人々にやさしい博物館にします	これまで、あらゆる項目について、ある程度の対応をとってきたが、予算的な制約もあり、完全なものとはなっていない。前年度に比し、変わった点は、館内案内業務スタッフの変更、警備業務スタッフの変更があり、このことによって、利用者に対する応対サービスがより親切丁寧になり、当館のイメージも上がったと思う。設備面においても多少機器機能の充実ができた。	B
◎誰でも利用しやすい施設、設備にします。	限られた予算のなか工夫しながら、順次可能なものから実施していく。	B
【目標 計画】 これからの博物館は、高齢者・障害者・外国人等誰でも利用しやすい施設・設備にしていなければならない。そのためにユニバーサルデザインへの対応に向け、リニューアルを含め、施設・設備の総合的な改修案を立案し、具体化していく必要がある。		
○施設の計画的な補修、改修	改修計画が必要であるが、市の財政状況を勘案しながら進めていく。	F
○省エネルギー・省資源への取り組み	KEMSの導入等での省エネ・省資源化、設備の老朽化への対応も限度になりつつある。今後設備の更新にあわせて省エネ・省資源化を検討する必要がある。	B

<input type="checkbox"/> 消防・建築設備等の点検、訓練、安全衛生の確保	—	厳しい予算のなかで、定期点検等で指摘のあった事項や修理が必要な箇所については修理を行った。			B
<input type="checkbox"/> KEMSの認定	KEMSの認定審査を毎年クリアしてきている。	平成21年度は「KEMSの認定」審査をクリアした。今後も「環境保護の啓蒙」「事務用紙使用量の削減」「周辺の清掃」に努めたい。			A
○ユニバーサルデザインへの対応	職員のバリアフリーに対する豊富な知識・意識をユニバーサルデザインへの知識・意識に変えていく必要がある。				B
<input type="checkbox"/> ユニバーサルデザイン取組	—	女性トイレの増と和式から洋式への改修については、22年度改修に向けて営繕が調査を行った。			B
◎誰にでも喜ばれるサービスを提供します	利用者が当館に求める新たなサービスの充実について、継続的なアンケートにより、見極めることが必要。その際、要望事項が、総合的な観点から改善すべき事項か個人の嗜好の問題かを、考慮すべきと考える。				B
【】これからの博物館は、誰からも喜ばれるサービスを提供し、利用者から高く評価される博物館にしていく必要がある。そのためには、まず、仕事量に見合った職員・スタッフ数の確保、次に、それらの職員の能力を高めるための研修を実施していく必要があるが、まずは、この前提となる予算の確保が急務である。					
○人的サービスの充実	—	ほぼ、職員・スタッフは配置されていると考えているが、業務委託において若干課題が見られる。			B
<input type="checkbox"/> 館内の運営協力体制	21年度職員数26人(アルバイト3人含む) 委託職員 インフォメーション5人、警備2人、清掃3人、設備1人	職員と委託業者の運営協力はスムーズに進んでいる。より、サービスが充実したものになっている。			B
<input type="checkbox"/> 職員の研修	20年度17日人 21年度24日人	ほぼ、必要な研修には参加している。			B
<input type="checkbox"/> 利用者サービス	—	インフォメーションスタッフは、来館者に丁寧に対応しており、アンケートによるとでは、9割ぐらいの来館者が満足している。			B
◎予算の充実に努めます	神戸市の財政状況が厳しいなか、予算の執行を工夫するとともに、展覧会での実行委員会方式、市以外からの支援金・助成金の獲得等、自主的な財源を拡充する方法を検討していく必要がある。				B
【目標 計画】 市の予算は、非常に厳しいものがあり、毎年減少している。そのため、博物館に必要な予算を獲得していく努力をこれまで以上に行うとともに、外部からの支援金・助成金の獲得に向け、積極的に行動していく必要がある。					
○予算の充実	神戸市の財政状況が厳しいなか、予算の執行を工夫するとともに、展覧会での実行委員会方式、市以外からの支援金・助成金の獲得等、自主的な財源を拡充する方法を検討していく必要がある。				B

ジュニアミュージアム講座	⑩117⑪109⑫117⑬102⑭100過去5年間平均109名	120名	55名 募集各回20名×6回=120名 江戸時代の切子に挑戦しよう！応募13名(1倍) ガラスエッチングに挑戦しよう！応募18名(1倍) ダイヤモンドペンでアート！15名(1倍) お気に入りの動物でオリジナル金屏風をつくろう！応募19名(1倍) 自分だけのオリジナルお面をつくろう！応募12名(1倍) 姉妹都市神戸とシアトルの歴史をまなぼう！応募3名(1倍)
企画展での子ども向け事業	⑮57名	60名	40名 募集各回20名×3回=60名 応募79名
夏のこどものためのワークショップ	⑯11⑰10⑱6過去3年間平均9回 ⑳329㉑327㉒222参加者延べ878名 1回あたり、32.5名	30名	6回156名、1回平均26名 募集は30名(ミッション！居留地の歴史を調査せよ！は保護者を含め30組) 弥生人の絵画教室とキーホルダーづくり31名応募(1倍) 南蛮屏風を動物でいっぱいにして！24名(1倍) どうぶつ好きな子よっといで！88名(2.93倍)ミッション！居留地の歴史を調査せよ！46名(当選は46名) どうぶつスタンプをつくろう！123名(4.1倍) 動物図鑑の技術-エッチングに挑戦！70名(2.33倍)
フリー参加型のワークショップ	㉓49㉔48㉕47過去3年間平均48回 ㉖1300㉗1093㉘754延べ3147名参加		44回 637名、1回平均14.48名 してきてさわって古代のくらし15回177名 めりえてザヴィエルの掛け軸をつくろう13回233名 うきでろ！うきでろ！古代の模様16回227名
子どもデイ	㉙1060㉚408㉛2523㉜897㉝187過去5年間参加平均845.8人(18年度は2回実施)		南蛮美術企画展・古地図展での開催 39名参加、応募60名、当選者通知60名、実倍率1倍

参考資料				
年度別の入館者数、予算				
		開催日数	入館者数	入館者数合計
昭和57年から平成8年までの計	(1982～96年)	3,815		3,095,604
平成9年	(1997年)	280	160,689	
平成10年	(1998年)	290	223,920	

平成11年	(1999年)	292	930,656	
平成12年	(2000年)	287	88,585	
平成13年	(2001年)	285	236,862	
平成14年	(2002年)	186	291,327	
平成15年	(2003年)	297	443,816	
平成16年	(2004年)	295	294,988	
平成17年	(2005年)	291	347,165	
平成18年	(2006年)	286	558,847	
平成19年	(2007年)	291	462,993	
平成20年	(2008年)	280	422,978	
平成21年	(2009年)	283	158,942	7,717,372